



崖の下



森山 一郎

昭和三十九年十二月、...

不況と暖冬の煽りをうけ、鶴子の経営する婦人服専門店は今冬めっきりと客足が減り、文字通り閑古鳥が鳴いていた。アルバイトの女の子が昼食に行っている間、一人鶴子は店内で商品と向き合っていた。

本来は客を待つべきマネキンも、ストーブに掛けられたやかんが奏でる熱砂を洗うような音を聴きながら、暑苦しく重いコートを着せられて、次に来る季節によって新しく身軽な衣装に着せ替えられるのを待っているかのように見えた。

「そういえば今日は姉さんの初産予定日だった、こんな事になるなら私もこんな婦人服より、子供服専門店でもやっていたら良かったのに」

彼女は心の中でそう呟いた。実際最近では子供に掛ける被服費用は毎年右肩上がり、婦人服や紳士服などと比べても遜色が無いほどの販売価格となっていた。

鶴子は元々は姉の光子の経営する料亭「さがら」の仲居として家業を手伝っていたのだが、独立心が強いせいか、五年前家を飛び出して、学生時代ドレスメーカー学院で鍛えた手腕を武器としてこの店を開業したのだ。もちろん開業資金は自分の貯金などでほとんどまかなえたが、商品構えを充実させたい一心から在庫過多に陥り、今では運転資金の保証人として姉の光子の婿養子であり、実質的な料亭「さがら」の最高経営者でもある健一郎の援助射撃を受けることになっていた。

その時電話のベルが鳴った

「毎度有り難うございます、ツルコファッションスタジオでございます」

鶴子は三十歳に手が届きそうだとは思えないくらいの若々しい声で精一杯受話器に向かって話しかけた。

「あっ、鶴ちゃん、生まれたよ、男の子だったよ、お姉ちゃんも子供も無事みたい」

電話の向こうはサキの弾むような声だった。

サキは相良家の三女で鶴子の妹である、年は三歳違いだ、見た感じはあまり年齢の差は感じられない、なぜならばサキはかなりの儉約家で、姉の光子が婿養子と結婚して料亭をやっている現在も、営業担当として姉の光子を支えているということを理由に、住まいは料亭の中に構え、二十四時間体制で予約の電話などを受け、頑張っているのだ。そういった理由で婦人服専門店を経営する鶴子と比べるとどちらかといえば地味な感じで、よく見ないと化粧さえもしているかわからないほどだった。

「良かったねえ、お祝いをしないといけないね、サキちゃん、一緒にしようか？」

鶴子はサキとの金銭感覚の違いから一緒にはお祝いをするつもりもないのだが、一応聞いてみた。

「えっ、私はもう友達のベビーショップで産着を買ったもの」

サキはまるで自分が計画性のない姉と比べていかにも準備万端だといわんばかりに実にあっさり断った。

姉の鶴子は妹に裏切られた気持ちもほとんど無く、ごく自然に健一郎の話題へと変えた。

「あっそう、じゃあ私も用意しなきゃあ。ところで兄さんは？　そこにいるの？」

彼女達の義兄である健一郎は初産とはいえ妻の出産の為に病院に出向く様なタイプではなかった。彼は趣味も多く最近ではゴルフ、磯釣り、俳句など多岐にわたり、時折居場所がわからないこともあった。

「それがいないのよ、どこに行ったのか、まさかゴルフじゃないかとは思うけど」

おそらく商工青年団の友人とコーヒーでも飲みながら、絵空事でも語り合っているのだろうと義兄のことを鶴子は思った。

「母さんと、父さんは？」

初孫を喜んでいるであろう自分の父母はどうしているだろう。

「ここに居るわ、父さんかなり喜んでるのよ、久しぶりの相良家の男の子だって」

光子、鶴子、サキ、三姉妹の両親である泰介とスエは、すでに料亭の仕事を引退しており、現在は悠々気ままな生活を送っていた。元々は父の泰介も相良家では健一郎同様婿養子の身で、口にはしなくとも相良の家では居所の悪さを感じることも時々あるようだ。

現在、料亭「さがら」の最高経営責任者は健太郎である。その妻である光子が現場の責任者としての女将業を任されている。彼女は客からの評判も良く、従業員に対しても人望はあるのだが、板前職人の腕の良し悪しや、仲居のお客に対する接客態度について等、母のスエは気づいたことがあれば、未だに事細かく指導しているのだ。

「わかったわ、後で病院のぞいてみるね、それじゃあ」

鶴子は電話をおしまいにした。

健一郎は行きつけのコーヒーハウス「サボテン」に居た。そこには健一郎の友人で酒屋家業の沢渡と、建材店を営んでいる吉岡も向かい合いの席でコーヒーを飲んでいた。

健一郎は手編みのセーターと綿のシャツを一緒にまくり上げて、ぐっと腕を組み二人に話しかけた。

「おまえさん達の方は何か情報入った？　こっちは昨日村さんとかけずり回ったけど、大した事は解らなかったよ、でも、この港から海外航路がスタートするなんて、未だに僕は信じられないね」

彼は今回のことに関してはよほど興味がある様で、煙草に火をつけながら、沢渡と吉岡に意見を求めた。

「まあ、焦りなさんな、海外航路の要望がこれだけ在日からあるのだから、彼らの夢が実現したとしても不思議では無いなあ、でも人の流れや貨物の流れはお隣の外国とやりとりするわけだし、地元としても何年後に国際港湾としてオープンする予定なのかしっかり調査しておかないと他の地域に比べて環境整備も遅れてしまうよね」

沢渡は「在日」という言葉をごく自然に使う、しかし健一郎としては差別用語の一つとして彼の頭の中には位置づけられている、日本人も「居住者」とか「非居住者」とかあるが、日本に住んでいれば沢渡の言う「在日」なのではないか、沢渡が言いたいのは「在日」の後に「日本人」とは続かない人たちのことを十把一絡げにして言っているのである。

「村さんの予想では台北か釜山、もしくは青島なんでしょう？　でも現状では半島の方が大陸よ

り可能性はありそうだね、ここから船乗って行く人本当に居るんでしょうか？」

吉岡は言った。

吉岡は健一郎や沢渡と比べても若く、20代半ばで、父親の建材店を手伝っていた、村さんは吉岡のおじさんに当たり、市役所の観光課長だった。

「どの路線にしても手始めは大変だろうし、おそらくその都市とは友好都市や姉妹都市を結ばなければあならんだろう、ここは在日外国人が多いからどの都市を優先してももめるんじゃないの？ 航路はすなわちこれ、金の流れる道でもあるわけだし、戦後問題とか騒いでくる輩もでてくるかもね、行政はしんどいよ、まあ最終的には国のお偉いさんが決めることなんだけど、決まった後のこの町での問題は行政どころか、この町に住む住民の問題になるんだものね、やんなっちゃうよね」

沢渡はまるで自分がすべてのやっかいなことを抱え込むかのような口振りだった、しかし韓国人が飲む「神露酒」や中国人や台湾人が飲む「紹興酒」や「茅台酒」の仕入れに関してもこの航路の如何では、沢渡の商売に大きく関わってくるものだと感じているのだろう、敢えて健一郎は反論することはしなかった。

コーヒーハウス「サボテン」の電話が鳴ったのはその時だった。

「相良君電話だよ、板前の雅さんから！」

マスターは無愛想に健一郎を呼んだ。

「もしもし、市場どうだった？ 良い魚あった？」

板長の田所雅夫は仕事一筋の職人であり、もちろん早朝も市場に仕入れに行くのだが、昼間のこの時間にも中揚げという昼市に顔を見せては珍しい魚を仕入れて来ては常連の客を喜ばせている、プライベートでは最近健一郎妻光子の末妹サキとの仲を噂するものもいる。

「若旦那さん、サキさんからの伝言なんですけど、若奥さんが無事息子さんを出産されたと言うことを、若旦那さんを捜して伝えるようになって事でした、それでは」

あっさり重要な伝言さえ終えれば、老舗料亭の板長である雅夫の電話ガチャンと切れてしまった。半ば自分の息子が生まれようとしているのにも関わらず、どこに行ったかも解らない婿養子に対して憤りを感じていたのかもしれない。

「どうしたんですか？ 奥さんおめでたですか？」

独身の吉岡が聞いてきた。

「息子ができた、今晚の勉強会は欠席、名前を考えにやあならん、それでは！ ごきげんよう諸君！」

健太郎は急いでジャンパーを羽織って「サボテン」を飛び出した。

彼は、なぜか自分が幼少の頃、兄弟と一緒に土手で遊んだ事を思い出した、皆坊主頭で、母が毎日のように繕いをしてくれたやや体には小さい着物を着て土手を何度も駆け上がった、夕焼けの中の煙突がにじんできていくまで土手にいた。そして次に小さな弟や妹が次々と生まれてきたことを思い出した。彼は感じていた、あの頃の兄弟達、あの新しい命が生まれた時、彼が感じた「自分に関わってくる新しい運命の誕生」、「新しい家族の誕生」。

健太郎はまさしくこの師走に父親になったのだ。

下関市市役所観光課長の村井勝は、朝から雑務に追われていた、以前は海峡の町として栄えた下関市も、今では製鉄や造船などの業種が不振なせいも、町にも活気が無く、正月を後数日後に迎えると言うのにも関わらず、海峡には木枯らしだけが通り抜けていた。しかしながらここ数日、市民からの海外航路開設に関する問い合わせや、大手旅行エージェントからの情報提供依頼などで電話が鳴りっぱなしだった。

実は昨日も市内の商工組合メンバーと海外航路問題についての勉強会で夜中近くまで意見交換していたのである。この問題は諸手をあげて歓迎というような簡単な問題ではなく、地域に後々まで大きく関わってくる問題であることを彼は知っていた。

下関市は人口二十五万人、そのうち外国人登録をしている「市民」が約三万人、登録をしていない在住外国人は約一万人と言われている、国籍別でいえば韓国、朝鮮、中国、台湾が中心で、夜の繁華街に行けば「リトルアジア」的な場所すら目に付く。村井も学生時代から日本のこの町に住みながら、在住外国人との色々な問題にも実際直面してきた「日本人」なのだ。

昨晚話題になったのは「この国への外国航路が開設されるのか？」 そうなった場合「どういった問題が市内で起こってくるのか？」ということだった。同席していた（株）台正交易の代表取締役社長である鄭宝流は在日台湾企業人としてこう語った。

「今この町に必要なのはどこの国に対して港を開くかということではなく、日本の中での国際港としての役割を果たすことを目標に、どれだけの国と貿易ができる港にするかと言うことで、一つの相手が決まれば立地的に見ても日本のアジアへの窓口になるべく、我々在日外国人とこの町の行政、企業、市民が一体となって、次々と門戸を積極的に開き、最終的にはこの町を国際港湾都市へと発展させることをまず考えるべきだ」

（株）台正交易は鄭社長の父が起こした台正グループの傘下の貿易会社で、横浜に本社を置き、アジア関係の交易会社では下関市のような地方都市に支店をかまえる数少ない企業である。もともと鄭社長の父である鄭会長は戦後台湾から日本のこの下関市にやって来た在日中国人であるが、息子の鄭社長は日本生まれなのである。五年ほど前からグループの創業の都市であったことから、下関市に支店が開設された。現在下関市の港から直接貿易業務は行っていないものの、アジアレストランやクラブ、輸入品専門店等を次々と市内にオープンさせ「台正グループ」として市民にも大きくこの町の未来が国際都市であるべきだということをPRしている企業なのである。

「村井課長、お電話です。台正交易の鄭さんとおっしゃる方です、内線二番に入っています」

女性職員から電話が入っていることを聞かされ村井は

「ああまたか、昨日の続きを聞かされるぞ」

と内心思いながら、受話器をとって内線2番を受けた。

「村井課長、昨日はお疲れさまでした。早速ですが今晚少々ご相談したいことがあるんですが時間取れますか？」

彼特有の言い回しで必要なことだけを早口で一気に問いかけてきた。

「昨日はどうも、昨日の今日で今度は何の話ですか、交際航路の件でしたら商工組合の人達も呼ばなければならないのではないですか？」

村井は鄭と一対一で会うことを避けるかのように逆に問いかけた。

「重大な問題です、まずは村井サンとお会いしてご相談したいし、ご意見もお伺いしたい、場所は相良さんところで夕方七時という事では？」

相良のところで会合となるとサラリーマンの村井にとっては違った話になる。村井は相良とは旧知の仲で相良が昔、旧姓守谷健一郎だった時代からの級友であるのだが、料亭「さがら」は市内でも有数の高級料亭で、地元の海の幸を中心に思う存分に提供し、和風の贅を五感に感じさせてくれる場所だ。よってもちろん一席設けるということになれば宴費もサラリーマンの村井が処理できる額ではない。

「相良君も会合には、。」

と言いかけたとき、せっかちな鄭が口を挟んできた。

「心配要らないよ、個人的に意見を聞きたいことであって、官官接待などと言うことではないから、もちろん村井サンは体一つで来てくれればいいよ、相良さんももちろん同席をお願いします」

村井は宴費のことで見抜かれたような気がして、複雑な心境ではあったが、相良も同席するのならまあいいかと思い、

「じゃあ、お伺いさせていただきます。では後ほど」

と鄭との約束を承諾し、電話を切った。

以前村井は鄭と相良の三人で食事に出かけたことがあった、鄭が「台正グループ」を市内に展開する事で観光課長の村井と、商工組合長の相良のバックアップが必要だと感じたのだろう。その日は新装開店した中華レストランの個室に通され、彼の経営するクラブから外国人コンパニオンも手配して、さんざん接待されたのだ。メニューは村井が今まで見たこともない食材を使った広東料理で、この町にもこういう世界があるのだなとその時は感じたものだった。

鄭は宴会中ずっと

「乾杯（カンペイ）！ 乾杯（カンペイ）！」

と杯を村井と相良とに交互に差し、中国人コンパニオンを流暢な中国語でからかいながら楽しんでいた。村井と相良には何を話しているのかもほとんど解らなかったが、おそらく卑猥な話題が中心になっていることだけは理解ができた。鄭は家族を子供の教育の問題で本社のある横浜に残してきており、こちらでは单身と言うことになる、自分の経営するクラブの小姐達にちょっかいを出すことくらいは日常茶飯事なのかもしれないと村井はその時感じていた。

村井は公務員として三十歳手前に社内結婚をして、現在妻と子供二人に囲まれて生活している、長男は今年小学校へ上がったばかりで、下の子は幼稚園に通い始めたばかりの女の子である。村井の妻は結婚後出産を理由に市役所を退職し、現在は家事に専念している。傍目から見ればごく一般的な家庭なのである。

村井は時々自分の家庭と親友である相良健一郎の家庭とを比べることがあった。二人は同じ高校を同じような成績で卒業した。転勤が多い父の元で育った健一郎は京都の大学へ進み、物書きにあこがれていたという理由で、京都の新聞社へ就職を決めた。健一郎が大学四年の夏休みに帰省

していた時に、村井は料亭「さがら」の長女であり、跡継ぎとなる予定だった当時高校二年の光子の臨時家庭教師に健一郎を紹介したのである。その後光子も京都の女子大に進学することとなり、卒業とともに京都の老舗料亭で接客の勉強を始め、翌年には健一郎と入籍し、三年前に下関市に戻り料亭を継いだのである。

村井は自分が光子の家庭教師を大学の教務部からのアルバイト斡旋で紹介を受けた時に、夏休み限定での希望であったため、当時帰省していた健一郎に紹介したのである。まさかこれが縁で健一郎が下関市に骨を埋めることになるうとは夢にも思わなかったのだが、今でも事あるごと健一郎に冗談交じりで

「俺が紹介してなければおまえは寒い京都で一生しがたい物書きだった、今のように商売は嫁さんに任せて趣味のように寄合活動などやってられんよ」

などと茶化すのである。

逆に村井は健一郎とは違って、地元の高校を卒業した後も地元の公立大学へ進み、すんなりと下関市市役所への就職を決め、同期の中ではもっとも早い出世をして現在の観光課長職にあるのであった。